

受講番号 19094 学校名 越知中学校 氏名 谷添 加代子

研究の背景

研究対象(学年、クラス等) 3年生 生徒数 45名
科目名 3年生 単位数(授業時数) 3時間 使用教科書名 New Horizon English Course 3(東京書籍)

クラスの様子・特徴

全体的に落ち着いてまじめに取り組める。素直で心優しく人と接する生徒が多く、ペア活動がスムーズにできる。基礎基本の定着が充分でないため、実践的なコミュニケーション活動や深い思考を要する作業では集中しづらく、全体の雰囲気を受動的になる時がある。

問題の確定

様々な活動を積極的に取り組み、授業を楽しみと感じられるための基礎力が定着できていない。

予備調査

A 授業の観察

単元ごとの授業や基礎的な内容を扱う授業では概ね集中して活動に取り組んでいる。ALTとのコミュニケーション活動やゲームの要素の強い活動には積極的である。プリント学習に抵抗感があるようだ。楽し「感じさせる」授業を強く望んでいるように感じる。

B 生徒による授業評価

「英語の授業が好きで興味・関心がある」と肯定的に捉えている生徒は65%であった。一方「嫌い、興味が無い」と感じ、英語や英語の授業に対して苦手意識を感じている生徒は13%おり、楽しくて興味が持てる授業を強く望んでいるようである。

C 学力データ

2年次の3学期末に行ったCRTの結果では、ほとんどの生徒がBランクからCランクで、やはり基礎力が定着しているとは言えない。定期テストや実力テストを見ると、単語力の強化と基本的な語順の知識が必要であると感じた。

リサーチ・クエスト

英語の単語や表現を定着させ、理解を早めるための効果的な指導法とは。

仮説・実践・検証

仮説1

50分という限られた授業の中で、生徒が主体的に英語を使って活動する時間をなるべく確保するような指導法を取り入れれば、英語に触れる時間や量が増え、単語力や基本文理解の向上につながるだろう。

実践1

新出単語の意味や本文訳、読み方を記入した「お助けプリント」を事前に配り、ペアで単語の意味を覚えたり本文の訳を確かめ合い、また本文のリーディングや聞き取りの活動をし、4技能を通して何度も同じ内容に繰り返し目を通すことで少しずつ理解度を高めていく。

検証1

「お助けプリント」を活用することで、「分からないからできない」という状況が消え、全員が50分間集中して活動に取り組むことができた。また、必要な情報をすでに書き込んでいるので、「それを使ってどのような指導をし段階的に能力を高めるか」という細かい指導法を考える余裕ができてきた。ペア間に大きな学力差があるとお互いに活動しづらい面もでてきたので、組み合わせに配慮が必要であった。

仮説2

教師が生徒に一齐に説明する時間を減らし、その分生徒同士が関わり合いながら英語力をつけていく時間を増やせば、一人だけで授業に取り組むよりも真剣に取り組め、教え合いの機会もでき、単語力や基本文の理解が高まるだろう。

実践2

教科書を使っている授業はほぼ全てペアで活動できる授業にした。ペアの相手が常に教師役として活躍できるように、ただ問題を出すだけでなく適切なヒントを出したり、出題の難易度を相手に合わせて問題を出すなどの工夫をするよう促した。また問題に答える側も同じ形態の活動に飽きがないように、時間制限を設けたり、自己ベストを作ることを意識させた。

検証2

最も大きな変化は生徒の英語使用量が5倍増えたことである。生徒にとってはチャレンジしようとする気持ちと楽しさも感じていたようだ。アンケートでは82%の生徒がこのペア活動を「役立つ・やりがいがある」と答えた。また、単元の確認プリントが以前と比較して短時間で解けたり、抵抗なく取り組む生徒が増えた。ペア活動導入後の定期テストでは学年の平均点が5点アップしたが、この活動による効果とは必ずしも言えない。

仮説3

基本的な語順や文法を十分に理解するために、言葉での抽象的な説明以外の方法(視覚的・聴覚的な方法)も合わせて語順を「体感的に」理解すれば、文法についての理解を助け、基本文の定着につながるだろう。

実践3

視覚的な方法としては、「主語・動詞・その他」という構成を理解させるため、色画用紙に「主語」「動詞」「その他」と書いたカードを黒板に常に貼り付けておき、英文を読む時や書く時に色と空間的感覚で文の構成を理解させようと試みた。聴覚的な方法としては、音のインプット量を増やすため速聴を取り入れ、同じ英文を何回も聞き慣らしてから、その文を応用させた文を聞き取らせ、意味を聞いたときに理解できるように試みた。

検証3

色分けをしたカードを使っている構文理解については、英作文の練習で大きな語順ミスすることが減った。また、主語の部分と動詞の部分がどこかを先に区別しておく疑問文や否定文を正確に作れる生徒が増えた。ただ、日本語を英文に訳す練習では、日本語の中で主語や動詞を理解することが困難な生徒への指導については、効果をあげることができなかった。

研究の成果

夏の研修後に授業スタイルを大きく変えて、ペア活動やお助けプリントを先に配布しての授業づくりは、生徒の活動の様子を冷静に見る余裕ができ、新しい指導へのチャレンジがしやすくなった。英語を理解することだけに留まっていたこれまでの授業と比べると、基本文や教科書の本文を「使って」活動ができるようになったことがうれしかった。何よりも、単語が読めずに授業への達成感を感じづらい生徒が、堂々と相手の生徒と活動ができた姿を見て、思い切ってやり方を変えてよかったと思った。

今後の授業改善の課題

今回の研究ではテストングが十分でなく、生徒の学力向上へとつながるデータ検証ができなかった。客観的に英語力を測っていくためのテストングの工夫が必要だった。速聴を使っている学習は今回学力向上の検証はできなかったが、予想以上に生徒は継続して取り組んでおり、音と意味をイメージで捉えて理解する、いわゆる右脳を活用した指導法を、生徒と一緒に取り組み研究していきたい。

リサーチについての問合せ先:

職場電話

0889-26-1102